
レーゾンデートル

明星 幽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レーゾンデートル

【Nコード】

N0201S

【作者名】

明星 幽

【あらすじ】

かつて、8年間の長きに渡り栄華を誇り、サービス終了から2年経った今ですら「伝説」とさえ謳われて語り継がれているVRMMORPGがあった・・・。

主人公、神佳幸^{みかゆき} 砂月^{さつき}は、16歳になったある日、突然眩い光で目覚める――。

目の前にあったのは青い空に深緑の森の中・・・って、ここどこよ!?

全ては、自由を手に入れる為。

お気に入りだったゲームに良く似た世界で、少女の第二の人生が今、始まった――！

基本的に主人公は最強・・・否、最凶です。

2011年7月24日・更新延期・停滞となります。 次のお話
が上がるのはだいぶ先になると思いますが、気長にお待ちいただければ幸いです。

第〇話 全てのはじまり（前書き）

初めての連載品です。くれぐれも過度な期待はしないで下さい。

大きく変更しました。

第〇話 全てのはじまり

閉じた瞼の奥に届いてきた眩しい光に、少女——みかざき 神佳幸 さつき 砂月
は、一瞬顔を顰めた後、ゆっくりと瞳を開いた。

一番初めに開いた瞳が捉えたのは、まさに「紺碧」と称するに値する程の青空。

「きれい・・・」

はつきりとしなない意識のまま何か硬い地に仰向けに寝転がった姿勢で、片手で底を作って太陽の光を防ぎつつ呟いた言葉は、彼女自身ですら特別体調も気分も優れていた時でしか聞けなかった鈴の様に澄んだ声。

（今日は気分いいからなあ・・・。）

何だと思いつながら、まるで新しく生まれ変わったかのような身体の軽さに驚きながらも、ゆっくりと上半身を起こし、やっと覚醒した意識で改めて周りを見渡し、視線を再度空へ向けた所で、

「え？」

絶句した。

「じじ・・・どう？」

呆然と呟いた声に答えてくれる声は無く。

「え？ ええー？ 本当にどこよ、ここ・・・」

とりあえず冷静になろうとつい先ほどまでの事を思い返してみる。

が、どうしても靄が掛かった様に記憶がぼやけてハッキリと思いだす事が出来ない。

「んゝむ・・・」

暫く唸ってみるが、結果は同じである。
ならば、と再び周りを見回してみる。

澄み切った空気。

周りを囲む緑の濃い森。

木々の隙間に沿う様に下っている小さな砂利道。

全てが精緻で、けれどもグラフィック的な要素は皆無。

昨日の事以外はまだ割と覚えているのだが、考えても自分はこんな所に居なかった、と確信が持てるような景色。

思わず、どんなファンタジーだった！と突っ込みを入れそうになつてから、はたと気付く。

（んん？ ファンタジー？）

そういえば、自身の生活の中にその単語を浮かべても違和感が無い・・・と、言うよりまさにその単語こそが一番当てはまると言っ

ても過言では無い要素があったのだ。

そう、ここはまるで・・・

「BF・・・の、中？」

砂月が僅か6歳の頃から始めた、今では珍しくも無いVRMMORPG。

8年と言つ長きに渡り活動し続け、栄華を誇り、サービス終了から2年経った現在ですら伝説とさえ言われて語り継がれているオンラインゲーム。

《ブランク・フォークロア》——通称“BF”と呼ばれていたそのオンラインゲームの中に酷似していたのだ。

第一話 とりあえず状況確認

「えーと・・・結局一体どーなってるのよ？」

眉を細めながら呟いた後、ひとしきり身の回りの確認をしてみる事にする。

（まさか死んでBFの世界にトリップ、なんて言う事になってたり・・・？）

少しばかりそんな風に期待しながら、とりあえずやってみようと思ひ、ステータスを開けないかと思つた途端に目の前に出て来た半透明のウィンドウに若干顔が引きつった。

思いがけず早々に現れたステータス画面に恐る恐る目を通してみる。

書かれていたのは、名前、レベル、種族、所属ギルド、HP、MP、称号、二つ名、の8つ。

順番に、ミツキ、1000、神人^{みひと}、カンフィデンス、10100、10100、無し、『スキルマスター』・『タイトルマスター』・『レベルマスター』以下略。

これが、BF内での自分のステータスだと砂月が理解するのにさほど時間は掛からなかった。

彼女のBFでのキャラの名前はミツキで、レベルに関しては忘れ

られるはずもない。

実の所、B Fでの基本的に公認な最高レベルは900だったのだが、彼女の場合はとある理由によって最終的な最高レベルである1000を手に入れていた。

種族も、人間・妖精・獣人・魔族・神人の5種族の中で、最も防御力と攻撃力が低い代わりに、妖精程まではいかないが高い初期魔法容量値と、一番高い回復能力を持ち、風の声が聞け5種族の中で唯一生まれつき魔法スキル無しでの永続飛翔が可能。

ただし、高レベルになるまでは扱いが難しく、比較的上級者向けの種族故に初心者から中レベル辺りが大半だったB Fでは需要が少なく、サービス終了時には最も人口が少ない希少種となった種族、
“神人”で合っている。

所属ギルドも、Bテストからの同期であり僅か20人しかいない古参プレイヤー、通称Bプレイヤー達及びBテストには参加していない正式サービスからの古参・高レベルプレイヤーからなる“秘密”と“信用”の二つの意味を持つ少人数高レベルギルド カンフィデンス で間違い無い。

HP・MPは言わずもがな。酷く見覚えのあるものだ。

称号は既に全1000種を揃えている証でもある二つ名の『タイトルマスター』を手に入れているから、当然大量に、それこそ1000はあるが、設定して付けていないから“無し”で合っているし、二つ名も上から三番目までを見れば簡単にそれがミツキのステータスだと言う事が理解出来た。

つまり現状から言うと、

「あたしって・・・今は砂月じゃなくて「ミツキ」なのね。」

言ってみてから、そういえば、と思い付き、スキルについて思ってみる。

が、ウィンドウは現れず、替わりとばかりにやけに鮮明に記憶の中を10000以上のスキルが流れていった。

「・・・ひょっとして出てくるメニューはステータスだけとか言わないわよね・・・？」

若干引き攣った笑みを浮かべつつ誰にともなしに呟いた後、少し時間を費やしてお目当てのスキルの中でも、どの種族であっても初めから習得しているスキル《必要スキル》の中の一つで、姿を映すか、光を反射し、目くらましに使うかの用途しかないスキルを探し出し、早速発動してみる。

【鏡】

頭の中でそう唱えた瞬間に、目の前に砂月の身長を超える大きな金縁の鏡が出現する。

ミツキの力が反映されているのだから、姿もずっと気に入っていた、良く知り合い達から不思議系だと言われていた綺麗な少女が映っているだろうと思いながら覗いて、やはりと納得する。

「うん、ミツキだ。」

呟きは真実を直に現している。

そこに映っていたのは・・・

腰まで届く下ろしたままの長い漆黒の髪、蒼穹と宵闇を混ぜ合わせた様な不思議な蒼い色の瞳。

身長は現実世界の自分と変わらず、出る所は出て、引つ込む所はきちんと引つ込んでいる美しい体系で、顔は色白でそこそこ綺麗な、何処か浮世離れた雰囲気宿す美しい少女。

「おお、前と変わり無く。・・・やっぱり綺麗な瞳だことで。」

現状が自分の気に入っているミツキの姿だと言う事で微笑みを浮かべつつ、改めて自身の姿を確認する。

変わった自分が着ている服は、縁に小さな銀のレースの付いた柔らかなシフォンの白い生地を重ね合わせ、裾の部分に蒼糸で施された鮮やかな刺繍をあしらった、HP及びMP100増加の付与が付いた、美しいがあまり派手では無い膝に掛かる長さの、肩袖付きのワンピース型ドレス。

履いている靴は、最高移動速度及び跳躍力アップの付与があるアクアマリンの宝玉が付いた銀の軽い金属で作られたクラディエータブーツサンダル。

（うーむ・・・改めてみると我ながらなんちゅー格好・・・。
ま、気に入ってるから好いんだけど。）

胸中で自身の服装の精緻さと意味不明さを改めて感じて感想を語りつつ、BFでは普通に出たスキルウィンドウが出なかった事と、ウィンドウが出ない替わりに異様なほど綺麗に頭の中に並んだスキルの数々や、そもそもメニューに関してはきちんとしたパスワード

が必要だった事、などを思い出して現状と照らし合わせ、とりあえずここがB Fの世界に良く似た「別の世界」である事を確認した砂月は、

「えーと・・・つまりここはアレか。B Fの並行世界とか、そんな感じな訳ですか。」

と総合して出て来た結果を呟いた後、少しばかりの嬉しさが込み上げてくるのを自覚する。

期待していなかったと言えば、それは間違い無く嘘になるのだ。どこかのアニメや小説の様に、自分もいつかはこんな状況になつてみたいと、砂月はずっと思っていたから。

人間誰しも、今が自分にとって最高の状況だと考え出したら嬉しさが止まらなくなるのは、当然の事で。

砂月は今にも鼻歌を歌いだしたい程清々しく嬉々とした気分で、両手を空に突き出して伸びをしながら澄んだ空気をいっぱい吸い込む。

が、やはりいざこの様な状況になると、色々と問題が積み上げられるのも実状で。

改めてここが自分の知っている普通の世界では無い事を確認した為に出て来た不安要素の多さに綺麗な顔を顰め、胸中とは正反対に、むしろ清々しい程の青空を睨みながら、

「大丈夫じゃない、問題だー！」

と、一部では有名な台詞を叫んだのだった。

第二話 進むための準備

「基本がBFと一緒にして事は、モンスターもふつーにいるってことなのよね・・・。」

気を取り直して、改めて状況を確認した後に、砂月はそう呟いた。

メニューの表示云々はともかく、ステータスに書かれているものや頭の中に浮かんできたスキル等が全て事実ならば、この世界の基礎はBFだと考えたのだ。

BFは、10年前に正式サービスを開始し、2年前にサービスを終えた典型的なRPGモノのオンラインゲームだった。

『様々なフォークロアの真相を明かしていく』と言う謳い文句の通り、世界には様々な民間伝承がNPCの口伝や本に書かれて存在していて、プレイヤーはその謎を解き明かしていく事になる。

フォークロアとはすなわちクエストの事で、その中には当然モンスターを倒す内容の物もあったし、何よりBFには固定された職業が無く、スキルによって自分の望む姿を描き出す使用だった為に、初めから持っている《必要スキル》と、種族別の《専用スキル》以外のスキルが手に入る、クエストやモンスター退治、ダンジョン攻略等は、受けて戦ってクリアして当然。

BFを楽しむには必要不可欠な要素だった。

（普通にモンスターから手に入れたスキルもあつたわねー・・・）

黄昏そうになった意識を苦勞して引き戻し、とりあえず装備だけでも万全にしておこう、と思ってアイテムボックスを開こうと思うが、生憎とスキルと同じくウィンドウが出ない。

「うわー・・・真面目にステータスしか出ないオチですか・・・」

げんなりしながら呟き、暫く四苦八苦ししながら色々試してみて何とか理解するに到った。

どうやら、自分の周りを囲む不可視の空間こそが、かつてBF内で「アイテムボックス」と呼ばれていた、アイテムを入れる事が出来る空間の箱・・・現状ではウィンドウが現れないのに何故かアイテム等の位置が手に取る様に把握できる、正式名称「スペースケース」。

「^{スペースケース}空間箱」、ね・・・ アイテムボックスとしか言わなかったから想像がつかなかったけど、確かにこれなら名前どおりね。」

若干の皮肉交じりにそう呟きつつ、スペースケースから幸いにもサービス終了時の状態のまま入っていた装飾品を、手探りで必要な物を取り出して付けていく。

ただし、真実を言ってしまうと、この世界がBFと同じ世界観であり、尚且つBF最後の時にログアウトした場所の近くであるならば、ハッキリ言ってこの場所に砂月・・・もといミツキにとって脅威になりえるものは無い。

B Fの世界観は、海・森・砂漠の大雑把に分けられたエリアが存在し、国や村は大体その三つのエリアに存在していた。

世界最大にして世界で初めて作られた最も古い歴史を持つ唯一の皇国『エンパイア皇国』を一番大きな規模の居住区であり首都として、そこから三大王国、〃麗しの豊地〃『ルーシッド王国』、〃黒の軍場〃『ヴァンクウイシュ王国』、〃海上の宝石〃『サファイア王国』の三国が続ぎ、更に最も神聖なる国である〃神教の聖国〃『サンクチュアリ聖国』、妖精達の故郷である〃文芸の賢国〃『ペネトレイト賢国』等を含めた計六大国と、その他大小様々な街や村々が存在する。

村や街の規模が大きくなる程近くにいるモンスターは強くなり、逆に規模が小さいと、弱くなる。

2年前、砂月がミツキとして最後にログアウトした場所は、ルーシッド王国から山を三つほど越えた、まさに初心者がいてもおかしくは無い・・・が、一人も見かけない様な辺境の低レベルのモンスターがうろつく森の中だった。

大体のレベルを言うならば、10〜40位の。

理由を簡潔に述べれば最後の瞬間を一人でのんびりと空でも眺めながら過ごす為に。

そして、今しがた起きた場所も、森の中。

ここが最後にログアウトした場所そのままと言う事は、それこそスペースケースの中が最後の時と変わっていなかった事を含めて、

予想に難くない。

ついでにあえて言うならば、最上級の高レベルプレイヤーであるプレイヤー・ミツキにとっては、この辺のモンスターなど虫けらも同然である。

しかし、それでもやはりいざという時の為に砂月が揃えた装備は・
・

《レベルマスター》の二つ名の象徴である900レベルになる為に、運営が一年に一度9月19日にだけ行う『難関レベル突破イベント』を見事クリアした時の副賞として貰った、一度行った事のあるフィールドなら何時でも転送する能力を持つ左手首に嵌めた黒曜石の宝玉がついた銀の腕輪。ちなみにパスワードは《転送 トラン スミット》。

900台のプレイヤーのみが受けられる強敵撃破のクエストでクリアした後の報酬品として貰った、主人が【探索】のスキルを使わず、3分間その場動いていない、もしくは休眠状態にある事を条件として、主人を中心とする直径1メートル内に存在が確認された時に自動召喚され、入って来た存在を遠ざけてくれる、自身のレベルより100だけ低いレベルを持つ風の魔獣付きの、大きめの銀水晶のピアス。

ちなみに時間制限は無く、主人が動いたり、【探索】のスキルを使ったり、休眠から目覚めれば自動的に召喚が解除される。

その他、自作の状態異常防御力増加の付与がある、右手の中指に嵌めた細い雪のファントムクリスタルで作られたリング。

サファイア王国のダンジョンで手に入れた首に掛けている、装備している間水中での行動の時に受けるダメージを無効に出来る雫形の白の中に蒼の光が入ったムーンストーンの宝玉のペンダント。

の、モンスターの方が逃げないといけない様な最強4点セットだった。

「これなら命が無くなる心配は無いでしょう！」

にこり、とそれはそれは愛らしい微笑みを浮かべた砂月の姿を見る事が出来た者なら、必ず言っていただろう。

とても綺麗で、とても「恐ろしい」笑顔だった、と。

しかし、現在進行形で彼女の周りには誰も居ない為、幸いにも真剣にその場から逃げる事を考えなければならぬ存在はいなかった。

「さあて、とりあえず下に道が続いてるみたいだからそれに沿って行ってみようかな？」

準備万全と微笑みを浮かべて、早速下へと向かおうとした砂月の足は、わずか数歩で止まった。

理由は至極単純。

彼女が用心はやはりもっとしておくべきだと考えたからである。

何一つ装備していなくてもモンスターの方が消し炭になる可能性100%なレベルを持つていながら、その事を現状的にほとんど信用していない砂月は、数秒間の沈黙の間、かの呪文を言うか言わないか真剣に考えた後、

（だめで元々、やってみる価値は在るよね！）

と答えを出し、期待を込めた不思議な蒼い瞳で前方を見つめつつ、そつと言葉を紡ぐ。

「《召喚 アレイン》」

とある存在をその場に呼び出すパスワードの効果を持つその言葉は、一瞬周りの音を押しのけて響き、砂月の前方の地面に青白く輝く二重の円に囲まれた五芒星の魔法陣を出現させた。

「おお！」

歓喜と期待を同時に含めた声を上げながら前を見つめる砂月の目の前に、それは姿を現した。

異世界では当然の事の様に問題が山積みになるのだと砂月が気付くのは、もう少し先……。

第三話 召喚とエンカウント

薄蒼の透明な翅を背中に生やし、白と青の薄いローブの様な服をその身に纏っている身長10センチ程度のそれ・・・もとい小さな男の子は、紫がかかった銀の髪を風に靡かせ、瞳を瞑ったまま空中にふわりと浮かんでいる。

全てが小さく、全てが精緻な美しいその姿は、正に「妖精」。

（す、すごい・・・、BFでもこんなに綺麗に顔とか見れなかったのに・・・）

胸中で感動の言葉を漏らしながら、砂月はゆっくりとその妖精に近づき、声をかけた。

「・・・シアン？」

それは彼の名前。

BFではただの「愛称」程度にしか思われていなかったもの。

けれど・・・

「・・・」

僅かに口を開いて息を吸い込んだ後、男の子はまるで砂月の声に導かれるかの様に、その小さな瞳を開いた。

現れた水色の瞳はすぐさま砂月を捉え・・・瞬間、無表情ながら

もぱつと喜びが小さな顔に広がった。

（わ、わああ！　かわいい！！）

自分の綺麗さそっちのけで同じく顔を輝かせた砂月に、妖精の男の子、シアンはふつと翅を動かし、砂月の目前へ迫り、

「マスター、あいたかった！」

と、やはり無表情ながらも頬に擦りよって小さな唇でキスを落とす。

当然砂月はその可愛らしさに破顔し、シアンの小さな頭を指先でよしよしと撫でる。

そして気付く。

「ん？　ますたあ？」

可愛い顔でいきなりトンデモない発言をした妖精のシアンを見ながら、砂月は彼についての記憶を辿った。

シアンは、ミツキが習得している魔法スキル【テイク】で捕まえた彼女の《使い魔》だ。

【テイク】とは、出現率の低いアクティブモンスターがプレイヤーに攻撃的な行動をしない極々稀に発生する〃テイク可能〃状態の時のみに使用できる魔法スキルで、使用した時に成功すればそのモン

スターをそのまま《使い魔》にする事ができる為、初心者から高レベルまで、プレイヤー間では結構な人気を誇っていた。

使い魔になったモンスターは、パスワード《召喚 アレイン》によって召喚され、HPが残り100になった段階で召喚が自動解除され、HPが100%戻るまでは召喚出来ない事を条件とし、本来自身が持つ能力及び使い魔になった為に新たに得た能力を駆使して主人を手助けする。

ちなみにレベルは、初めは捕まえた時のままだが、戦闘経験を積んで行く内にレベルアップをして行く為なかなか戦闘では心強いパートナーなのだ。

砂月も、8歳の頃にエンパイア皇国近くの森の中で「ティム可能」状態の希少アクティブモンスター『ブラウフィー』の男の子型を見つけ、運よく捕まえた。

それが彼、シアンであり、ミツキにとってははじめてのプレイヤー以外の友達の様な存在だった。

（Bテストからの同期のBプレイヤーと他の古参プレイヤーの仲間に見せに行った時に言われた「お前自身は基本魔法職として動いているのに前衛を捕まえず後衛を捕まえてどうする。効率が悪い。」とか「可愛い」ってだけで捕まえたからって「単純だねー。」とか言われたのは未だにちよつとショックなんだけどもなあ・・・）

瞳を遠くになげて過去の少しカナシイ思い出に沈む砂月の記憶は正しく、事実その後は暫しへこむ事になった。

そんなこんなで手に入れた砂月のお気に入りの使い魔シアン。
そんな彼が何故自分の事を《マスター》と呼んだのか、砂月は遅
まきながら理解していた。

「そうかぁ……。使い魔であるシアンにとってはあたしは『主』
な訳ね。」

ふむふむ。と納得しつつシアンを見ると、どうも通常装備ならし
い無表情でこてん、と小首を傾げて、

「どおしたの、マスター？」

と聞いて来る。

（ああああ、かわゆいっ！！）

思わず小さな体を手で包みこんで、潰さない様に注意しながらそ
っと握りしめつつ指先でその紫がかった銀の髪を整えてやる。

途端に水色の瞳を細めて気持ちよさそうにされるがままになるシ
アンに、砂月は当初の目的を横に放ってこのまま和みたい気分にな
る……。が、何とか気力で自制し、

「ええっと、これからあの下に続いている道を辿って行こうと思うん
だけど、あたしを守ってくれるかな、シアン？」

と、瞳を瞑って頭上に幸せそうに花を咲かせていたシアンに問い
かける。

途端にぱつと空中へ躍り出て砂月の左肩に座ったシアンは、やはり無表情のままこくと頷いた後、

「シアンはマスターをまもることが、やくめ。かならずマスターをまもってみせる。」

と力強く宣言する。

「うん！　お願いね、シアン！」

それに笑顔で答えつつ、胸中では今更ながらにBFでは出来なかった会話がきちんと成立している事に驚きながらも喜び、改めて、砂月は下へと続く小さな砂利道を進み始める。

さて、勢い込んで進み始めたは良いが、やはり例外・・・と言うか、予想外な事はあるもので。

「きゃ!?!」

1分と経たない内に、いきなり真横から飛び出して来た全長50センチメートルはあるだろう、灰色の毛に紅い瞳を持つ巨大なウサギのようなモンスター・・・以前は「ノンアクティブ」モンスターであつたはずの『グレーラビット』によって強制的に戦闘開始。

だが、流石は砂月の使い魔、と言うべきか。

真面目に驚いて、意識外で発動した、全て戦闘になる事で自動発動する《補助スキル》の、対象を威嚇し、自身のレベルに応じて攻撃力を10%減少させる【威嚇 スレット】や、対象の移動速度

を低下させ、自身のレベルに応じて回避率を5%下げる【牽制 エック】、対象の反抗的・戦闘的意識を自身のレベルに応じて大幅に低下させる【抑制 リストレイント】等以外ではその場から飛びのいてグレーラビットから距離を取る事しかしていない砂月に対し、彼女が無意識ながらも発動した補助スキルのお陰で身動きが取れなくなっている哀れなモンスターに、主の代わりに対応するシアンの行動は素早かった。

通常の限界値である900と言う、砂月には及ばないがこの場では桁違いなレベルを持つシアンにとって、たかが30レベル程度のモンスターなど弱いの一言で片づけられる。

この場所では本来なら脅威となりえるはずのグレーラビットなるモンスターは、いとも簡単に氷漬けとなって地に転がり、シアンが小さな腕を振るうと破碎して消えた。

「び、びっくりしたあ。グレーラビットってアクティブモンスターじゃ無かったはずなのに。」

後には、真剣に補助スキル等を起動させておくべきだと思い知った砂月と、何食わぬ顔・・・ならぬ通常装備の無表情で得意の水魔法によってグレーラビットを氷漬けにして主を守ったシアンのみ。

一瞬にして常の静けさを取り戻した森を、シアンがいる安心で瞬時に対応できなかった自らの失態を省みて・・・ぶっちゃけ動けない事は半分くらい予想していたので、今度はきちんと《索敵スキル》の、レベルに応じた範囲内で人物・モンスター・建物等の存在や位置が解る【探索】を周囲一帯に掛け、森の中でも使えそうな魔法スキルを頭の中で整理しながら、砂月は再びゆっくりと歩き始めたのだった。

第三話 召喚とエンカウント（後書き）

誤字脱字、その他おかしなところがあれば、ご連絡下さい。

第四話 初めましてこんにちは

頭の中に直接流れ込んでくる【探索】から解る周りの状況を苦勞して理解しつつ、

（これは慣れるまでじっくりやるべきだなあ・・・）
などと思って暫く緩い坂道を下る事約10分。

思ったより過程は長かったが、やっと森が切れ、広い草原へと辿り着いた。

水の音が聞こえる事から、すぐ近くに川が流れていると確信した砂月は、やっと森を抜けた解放感と水の癒しを求めて幾らか前方へ進んだ後、ちらりと見えた川に喜び勇んで、シアンが肩から落ちない程度の速度で草原を抜け、河原まで出た瞬間に、

「とーちやく！　つて、え」

と叫んだ後、前方に見えた人影を見て、驚愕する事になった。

「どうわ!?」「きゃあ!」

涼しげな川のすぐ傍で、低音の男と、可愛らしい澄んだ少女の悲鳴が同時に上がる。

「おや?」

1テンポ遅れて響いたのは、穏やかな青年の声。

言わずもがな、少女とは砂月の事。

何故悲鳴を上げなければならなかったかと言つと、これも至極単純な理由で……。

「い、いやぁ……すまねえな嬢ちゃん。こんなむさくるしい男の上半身なんか見せちまつて。」

低い声の男の言葉は事実で、両手で顔を覆つたまま地にしゃがみ込んでいる砂月は、つい今しがた川で水を浴びていたその男の上半身を見てしまったのだ。それはもう、バツチリと。

「い、いえ……」

まだ顔を手で覆つたまま答える砂月は、内心立派にパニック状態だった。

はつきり言つて父親以外の上半身など見た事無い彼女は、そういう事に対する対抗力がゼロなのである。

同時に、折角グレーラビットの急襲によつて学んだ、周囲を警戒しなければならぬと言ふ事も出来なかったのだと少しばかり落ち込む。

暫くして肩から離れたシアンが「マスター、もういいよ?」と声をかけてくれるまでその態勢のまま動かなかったのは言うまでも無い。

「大丈夫でしたか?」

ようやく立ちあがってまともに前方を見れた砂月に声をかけて来たのは、薄緑の長めの髪に、金の瞳を持った穏やかな物腰の、20代前後に見える綺麗な青年だった。

「あ、はい。大丈夫です。」

おそらくは1テンポ遅れて言葉を零した青年なのだろうと解釈しながら、砂月は頷く。

シアンはもう定位置の左肩に乗ってじつと青年を見ていた。

「それはよかった。」

一瞬シアンを見て驚いた顔をするも、すぐに元に戻して砂月に微笑みかける青年に、胸中で？マークを浮上させながらも、砂月も同じく微笑みを浮かべる。

一瞬その場に穏やかな雰囲気舞い降りる――

が、流石に長々とは続かず、青年の後ろからひょっこりと現れた茶髪に青眼の30代前半くらいの男が、茶髪の頭をかきながら砂月に声をかける。

「いやあ、すまなかったな嬢ちゃん。・・・やっぱりこんな所で水浴びなんてするもんじゃないなあ・・・」

苦笑を浮かべて語りかけてくる男に、砂月は首をふるふる、と横に振りながら、

「いえいえ、いきなり出て来たあたしにも非はありますから。」

と答えた後、改めてお互いが頭を下げる。

一通りお互いの謝罪大会が終わり始めた頃、青年が緩やかに二人の言葉を沈め、

「ここで会ったのも何かの縁でしょう。良ければお名前を教えて貰えませんか？」

と砂月に言ったのをきっかけに、自己紹介へと発展する。

まずは、と発案者の青年が優雅に胸元に手を当てながら一礼して、言葉を紡ぐ。

「私はリーフ。冒険者をしています。隣のガレスさんとは旧友であり冒険者仲間です。どうぞよろしくお願いします。」

再びにこりと優しい微笑みを浮かべる青年、リーフに、砂月もぺこりと頭を下げる。

続けて、砂月が何かを言う前にリーフの隣の男が、

「俺はガレス。リーフと同じく冒険者をしている者だ。基本は前衛で剣を振り回してる。」

とにやりと笑いながら言い、背中にある彼の身長程もある大剣をチンツと鳴らして見せる。

そして再び砂月が何か言う前に、今度は彼女が確実に絶句するような爆弾発言を投下してみせた。

「で？ お嬢ちゃんは家出てやつか？ それにしては不用心だけど

よ。」

「・・・は？」

実に間拔けな声が出たと理解しつつも当然の如く見事に一時停止をした砂月。

それを不思議そうに見ながら、ガレスは尚も言葉を紡ぐ。

「ん？ 違ったか？？ 俺はてつきり何処かの貴族の娘さんが窮屈さに負けて家を出て来たと思ったんだが？」

ついでに、「なあ、リーフ？」とリーフにも降る事も忘れ無いのだから、ちゃっかりしている。

この言葉には微笑みを苦笑に変えたリーフは、申し訳なさそうな顔をしつつも、

「ええ。私もそう思いました。——安全面に関してはそこそこ対応出来そうです。」

と隠さずに同意する。

「はい？」

再び間拔けな声が出る砂月だが、今度はそんな事を気にしている余裕も無かった。

（は？ 貴族？ ご令嬢？ あたしが??）

再び内心立派なパニツクを起こしつつも、何とか否定の言葉を口にする。

「まさか！ あたしはそんな高貴な生まれじゃありませんよ？」

「あれー？ そうかあ？」

「・・・そうだったんですね。」

言い切ってもまだ半信半疑と言った風で見てくる二人に、何故そ

言う事はすぐに分かるのか自分でも不思議に思いながら、こりやダメだと直感した砂月は、深呼吸をした後、気を取り直して自らの自己紹介をする。

「とりあえず、あたしは貴族の生まれじゃありません。今はえつと・・特に何かをしている訳じゃありませんけど、以前、と同じく冒険者になろうとは思ってます。」

「以前」を強調してそこまで言った後、今の自分の境遇とこの世界についての知識の少なさを照らし合わせて、

「・・・ずっと森の中で人と会わずに暮らしてきたただの世間知らずです。名前は・・・ミツキ、と言います。よろしくお願いします。」

そう言った後、少し迷ったが結局、このドレス風の服を着始めてからはBFでも良くやっていた、ドレスの裾をつまんで広げて足を少し折って緩くお辞儀をする、と言うお礼の仕方で締めくくった。

当然その仕草を見た二人には、「やっぱり令嬢では？」と言われる事になったが、今までずっと沈黙を守っていたシアンがぱつと躍り出で「マスターは、れいじょうじゃなかじゃない。」と否定し、且ついち早くシアンの正体が砂月・・改めミツキの《使い魔》だと予想していたリーフが、それが真実だと知ると、まだ疑問を浮かべていたガレスに使い魔のあれこれを説明し、やっと元・同業者だときちんと納得してもらえたので、まあ結果オーライだろう。

兎にも角にも、自分が令嬢では無い事を納得してもらえた事が一番安心できたミツキであった。

第五話 アドバイザーを募集します。（前書き）

今回は少し短いです。

第五話 アドバイザーを募集します。

ミツキが令嬢では無い事を証明した自己紹介が終わった後、暫く話していた三人だったが、唐突にリーフが、

「折角ですから、私達と一緒にこの近くの国に行きませんか？」

と提案してきた。

当然顔を輝かせて同意したミツキは、ついでに今のこの世界を生きていく為に必要な事を色々知る為には、彼らについて行くのが今の所一番の策だと考え、

「そのついで・・・と言ったら悪いですけど、今の世について色々教えて貰えませんか？」

と二人にお願いする。

二人は頷いて、「勿論良いぞ！」「私に教えられる事なら何でもお教えしますよ。」と微笑む。

二人の当たり前前だと言う様な笑顔に、

（ちょっと可笑しな出会いだったけど、こんなに好い人たちに早々に出会えるなんて、あたしって幸運だなあ）

などと考えながら、ミツキは深く息を吸い込み、今度は普通の深いお辞儀をする方針で、

「よろしくお願いしますっ！」

と、頭を下げた。

そうして今後の方針も決まった所で、早速と三人は近くの国『ル
ーシッド王国』へと向いはじめた。

ぽかぽかとした昼下がり、ごつい騎士風の男と術師風の綺麗な青年、それに不思議な蒼の瞳を周囲に向けて好奇心の微笑みを零す美しい少女が並んで歩く様は、少しばかり・・・否、かなり絵柄的にはおかしいものだったが、当然三人はその事には気付いていない。

「わぁ！　ちゃんとお魚も見えるんだ！」

川の縁を歩いている為に偶然見えた泳いでいる魚を見つけてはしやぐミツキに、二人は微笑ましい視線を送る。

それに気づかず水面を眺めながら歩くミツキには、やはり年相応、もしくは少し実際見える16歳程度と言う年よりは若干幼く見えて、二人の心境は正に見知らぬ土地に来てはしゃぐ年の離れた妹を見守る兄そのものと化していた。

本来ならミツキと一緒に瞳を輝かせるであろうシアンは、ガレスとリーフが傍にいると言う事で今は召喚を解除されていて、その代わりに訓練と自らで称して索敵スキルの【探索】を現在進行で掛けている。

流石に何時までもこの二人のお世話になるつもりは無いので、早く慣れなければと思い持続させているのだ。

（割と慣れてきたかな〜！）

と胸中で自分の順応度の高さに驚きつつも喜び、再び顔を前へと戻す。

それを見たリーフは、ミツキの願いを思い出して静かに語り始めた。

「私達が今から行くルーシッド王国は、現在では三大王国の一つ、
「麗しの豊地」と呼ばれ、六大国の一つでもある自然豊かな王国ですよ。」

「そうそう。すっげえでかい山とかに囲まれてて、作物を育てるのも取るのにも最適な場所なんだよなあ！ここから一山越えた所にあるんだぜ？」

穏やかに語るリーフの言葉に続いて熱く語るガレスの言葉に、瞬間ミツキの足が止まる。

「え？ ガレスさん今、一山越えた所・・・って言いました？」

次いで笑顔を若干引きつらせて問ってきたミツキに、ガレスは不思議そうな顔をしながら、「ああ、言ったけど・・・？」と答える。

「・・・あれー？」

しかし尚も立ち止まって、更に今度は腕を組んで首を傾げ始めたミツキに、いよいよ何事かとリーフが尋ねる。

「どうしました？ ミツキさん。」

穏やかながらも何処か心配そうな雰囲気宿ったその言葉に、ミツキは一瞬考えるのを止めて、

「あー、いや、何でも無いです。ただ自分の知識の無さにある意味驚いたと言つか・・・。ただ以前と変わってるんだとか何とく」

と誤魔化すものの途中からおもいつきり暴走してしまい、

「えー・・・ミツキさん？」

「ミツキ??」

「あう。い、いえいえ、何でも無いんで気にしないで下さい！」

「はあ・・・？ まあ、それなら良いのですが・・・」

「何かあつたら相談しろよ？」

「はい！」

と、結局あやふやなまま勢いだけでしか終わらせなかった自分に若干落胆するミツキだが、正直それどころでは無かった。

何故なら――

（えーと、確かBFでは間違い無くあたしが目覚めた場所から三つ山を越えた場所にルーシッド王国があつた訳で・・・

ひょっとして、実はかなり時間が流れてて、地層が変わった・・・とか？ それとも、存在する国名は変わらないけど場所とかは全然違うとか・・・？）

と、内心あり得るかもしれない予想に蒼白になっていた。

（ちよ、ほんつきで冗談じゃないって！ スペーススケースとかスキルとかはどうかなるから心配いらないけど、今持つてる地図が使えないってことは、また1から地図集めなきゃいけないって事でしょ！？ どーしてくれんのよ全くっ！）

胸中で真面目に頭を抱えるミツキの懸念は本当で――

本来、BFはマップ機能と言う物が無く、その為に多くのワールドを現す地図が、露店や魔物のアイテムドロップ、はたまたクエストで出てくる仕様になっていた。

当然プレイヤー達は四苦八苦して地図を集めてから新たなワールドを冒険する事が当然となっていたし、もし今ある殆どの場所を記した地図が全て使い物にならないとすれば、直線の十字路しかない病院内ですら散歩していたら迷っていたと言う経緯を持つ完全に方向音痴なミツキとしては、迷子所では済まない。

下手をすれば全く知らない場所に漂流・・・何て事もあり得ないはないのだ。

（うわ、本気でヤバイじゃん。これは本気で・・・本気でガレスさんとリーフさんに徹底的にこの世界の云々を教えて貰わないとっ！）

何よりも知識を提供してくれるアドバイザーが必要なのだと思い
知らされた今日この頃。

第六話 新たな情報Ⅱ 野宿

夜の帳が下りはじめた夕方。

ようやく山の麓まで来た三人は、川の近くの開けた場所で野宿をする事になった。

徒歩ではこれ程までの時間が掛かるという事にしばし驚いていたミツキだが、野宿と聞いて更に驚愕した事は、最早言うまでも無く・・。

（え・・・、ど、どうしよう。あたし全くやり方とか解らないんだけど・・・）

と、努めて口には出さずに胸中で不安を現す。

しかし、準備を始めても視線をうろろさせるだけで一向に作業に加わらないミツキに二人が疑問を感じるのはそう遅くは無く、少しの間だけ作業の手を止めたガレスがミツキに尋ねる。

「どうしたんだ、ミツキ？ 早く野宿の準備しよーぜ？」

「え、ええつと・・・ですね・・・」

「ン？」

首を傾げて先を促すガレスに、流石にこればかりは誤魔化せない
と、ミツキは本当の事を話す。

「実は……野宿のやり方って、分からないんですよ……」
「おお？」 「おや……」

ミツキのこの発言には、今まで黙って経緯を見守っていたリーフも顔を上げて驚きの声を発する。

次いで訪ねて来たリーフの問いは最もで――。

「しかし、ミツキさんは森の中にいらっしゃったんですよ……？」

(うあ……)

実に最も。

ミツキは内心で昼頃の自分の発想を振り返って、げんなりする。

が、しかし抜け道が無い訳では無く、今回はそこに逃げようと言葉を紡ぐ。

「いやー、森の中って言うても家があったんで、野宿ってわけじゃ無かったんですよー！」

嘘八百も好い所だ。

何となくある意味間違っていない様に感じてしまう所が、人間の感覚の恐ろしい所だと自分の言葉で内心身を縮めるミツキ。

しかし当の二人はというと、

「おお、なるほど。」

「そうだったんですか……。では、少しずつで良いので覚えていきましよう。今の冒険者稼業に野宿は必須ですから。」

と普通に納得して対応してくれる。

これには、人並み……。は少し怪しいものの、流石に恩人に対する良心は持つているミツキは罪悪感が湧きあがってくる。

が、これもこの世界で生きていくために必要な事だと自身に言い聞かせ、丁寧に1から教えてくれるリーフの説明をしっかりと聞く。

幸いにも、格段に高くなった記憶力はスキルだけの専用チートでは無かつたらしく、すぐに覚える事が出来た。

その後は、三人で仲良く薪を囲んでの晩食となり、二人に分けて貰った少し硬めのパンと干し肉……。何の肉か非常に気になる所だが怖くて聞けなかった……。を食べ、食事後にはガレスが自分の冒険譚を面白おかしく語って、時々リーフがそれは流石に違うでしよう、と苦笑を交えたつつ込みを入れるのを聞きながら存分に笑った。

久しぶりにこれ程までリアルで笑ったミツキは、その事による幸せを噛み締めながら、尚も続くガレスの言葉に耳を傾けていた。

さて、問題はそれからだった。

すっかり空が闇に覆われ、銀色の月と星々のみが輝く時間帯となった頃。

楽しい雑談の時間も終わり、さあ寝ようかと言う事になり、寝る
に着替える、という事態に三人は揃いもそろって固まった。

「……どうしようかね？」

暫くして一番初めに再起動したリーフの言葉に、ガレスは沈黙し、
ミツキもまた無言でどうするかと頭を悩ませる。

流石に男性の目の前での着替えなど、例えBFと同じやり方だと
しても出来そうにない。

そう言うBFでは、システムの一つに『二十四時間経った服は洗
浄しなければならない』と言うゲームとしては非常に珍しい仕様を
有していて、プレイヤーは1日ごとにきちんと服を交換しなければ
ならない事になっていた。

服やズボン等は勿論の事、下着も洗浄しなければならない。

基本は一度試着した服をアイテムボックスに戻す事によってレベ
ル1の頃から必要スキルの中にある【浄化】——本来なら浄化の
クエスト等で使うものが自動発動して、一分間のデイレイ後に洗浄
が完了する仕組みになっている。

そんな仕様が存在するBFだ。

当然ゲーム内でも着替え等はある、その時にも女の子としては色
々不便があった。

「あ。」

が、しかしこの回想がミツキに良いアイディアを出させたきっかけであつた事は確か。

「そうだ！ここは森の中なんですから、少し森の中に入っちゃえば見えないじゃないですか。」

と二人に提案する。

この発言には男二人とも揃って「何で気付かなかったんだろう・・」と若干落ち込みながらも承諾し、かくして無事、ミツキは着替えを終え、それぞれ持っていた毛布にくるまり地面に寝転んだ。

ミツキも、黒い薄い生地を重ね、銀糸で刺繍をしたネグリジュに着替えて、何故か持っていた黒のふかふか毛布にくるまって横になる。

火を消した薪を囲んで三角形に寝ている歪な状況ながらも、久々に近くに人がいてくれる安心感で、程なくしてミツキからはすうすと規則正しい吐息が聞こえ始める。

一方で、少女とは言え一般の女性とこれ程まで近くで寝る事に慣れていない男二人組はお互いの心境を知りつつも無言で瞳を瞑っていた。

まだ眠気は訪れないものの、近くで眠る妹の様な少女が安心して眠りにについている事を悟った二人は、胸に満ちる温かな喜びを感じながら、最後にお互い微妙な位置ながらも瞳を開いて会話をする。

すなわち、この少女には自分達だけでは今の世の常識を教えきれないのではないか。ならばやはり、それ相応の知識を持った相手と会わせるべきだ……と。

ミツキの預かり知らぬ所で会話は着々と進み、遂にはとある相手と会わせる事で意見がまとまった。

二人の心境にあるのは、ただただこの不思議な少女が困らない程度に暮らせるだけの知識を確実に与えてくれる存在。

（（無事に会えればいい。））

決して言葉には出さずにそう胸中で語った二人は、後に合わせる事をしっかりと胸に刻んで、遅まきながらもミツキと同じく眠りの中へと落ちていく。

ゆっくりと、少女の道を照らす光が差し込んできた瞬間であった。

第六話 新たな情報Ⅱ 野宿（後書き）

誤字脱字があれば、ご報告下さい。

第七話 ルーシッド王国と冒険者ギルド（前書き）

今回は少し好き嫌いが分かれるかも・・・（汗

ようやく主人公の本性が出てきます。

第七話 ルーシッド王国と冒険者ギルド

早朝、朝日が昇りきらぬ前に山の麓を発った三人は、問題無く山を越えて、無事ルーシッド王国へ到着した。

「うわぁ！」

付いた途端にミツキが上げた声は、紛れもなく感嘆で……。

今彼女の目の前にあるものは、「麗しの豊地」とまで言われるルーシッド王国の首都の光景。

石畳の地面を真っ直ぐ伸びて、十字路で繋がるメイン通路。丁度十字架の所には大きな噴水があり、清涼さを醸し出している。縁に並ぶ店に、少し通路から離れた位置に存在する白磁の家々。

少し視線を上にならせば、鮮やかな空の青と森の緑が周りを囲み、まるで自然に守られているかのように感じさせる。

何よりミツキが驚いた事は、通路を行き交いする存在が、人間だけではない事。

（す、すごい……ゲーム内ではこんな人数居無かったし、ここまでリアルに他種族を見る事もなかったからなあ……）

そして同時に、ゲーム内でのルーシッド王国との違いについてもまた、ミツキは感じていた。

（噴水・・・は、あつたね。でもこんな街並みじゃ無かつたよなあ・・・）

やはりここはあくまで「別の世界」であつて、B Fが基礎になつていたとしても、色々異なる事があるのだろう。

そうなれば当然自分が当たり前だと思つている事も、状況によっては異なってくる。

（本気で知識が必要だわ・・・）

きよろきよろと辺りを見つめつつも、しっかりと確信してゆく事実はどうしたものかと頭を悩ませるミツキであつた。

そうして一人胸中内でのみ言葉を零しつつ、前を歩いて行く二人から離れない様にしっかりと付いて行く。

離れたらこんな場所一発で迷子確定だ。

そんなミツキにガレスは上機嫌で、リーフは控えめながらもやはり嬉しそうに、あれもそれもあると、色々な物をミツキに紹介してゆく。

その一つ一つに好奇の眼差しを向けるミツキに、二人は偉くご満悦の様。

その後も暫く見学は続いたが、とりあえず先に行く事になつていた《冒険者ギルド》と呼ばれる、六大国の何処にも存在する冒険者を管理し護る組織の本部へと辿り着いたので、話は一旦お開き。

白磁の街並みの中に一つだけ存在する黒の建物の中へと入ってゆく。

しかし、中をザツとではあるが見回したミツキは、ここは自分には不釣り合いかもしれないと内心少し脅える事となった。

中にあつたのは、RPGなどではお馴染みの風景。

丸テーブルとイスが広い室内に並び、入口からいって左側の前方には大きな板に雑ながらもそこそこな量の紙が張り付けてある。

依頼書だ。

その板——掲示板のすぐ隣には、カウンターがあり、数人の受付員が並び、内の何人かは客の相手をしていた。

しかし、そんなRPGにはお決まりの光景よりも、真っ先にミツキの目に留まったのは、丸テーブルを囲んだイスに座る鎧だの剣だのローブだの杖だのをもった同業者、もとい冒険者たち。

皆一様に入って来たばかりのミツキ達三人を見据えている。

中には、ギラリと瞳を光らせてわざとミツキを怖がらせるように不敵に笑って睨んでくる輩までいる始末……。

（これ・・・あたし無事に宿まで行けるかなあ？）

胸中でそんな事を呟いたミツキは、当然あからさまでは無いながらも若干表情としては硬かった。

そんな彼女の心中を察してか、リーフがそつと肩に手をかけて安

心させるように並んで歩いてくれる。

ガレスも、ミツキに当てられる視線をかばう様に前を歩いて、時々視線の先にいる者を逆に睨み返している。

そんな二人に内心感謝をしつつも、ミツキは気を引き締めた。

こんな所でうじうじなんてしてられない。

これからこの世界で生きていくならば、きっと人間相手など比にならない位、もっと怖い体験だってあるはずだ。

立ち直った後のミツキは、基本的に二度と崩れ落ちない。

例えそれが、カウンターまで歩いて来た自身に対する、

「おいおい、そんなお嬢ちゃんが同業者になるって？ やめときなよ。狼に散々追いかけられた拳句ぱつくりと食われてあいつらのエサになるだけだぜ？」

牽制の籠った嫌みであっても。

途端にゲラゲラとバカにした様な笑いが室内に広がる。

明らかにミツキの事を、ただのか弱い女の子だと思つての揶揄。

これには流石にガレスは当然の事、たった2日の付き合いであっても普段から穏やかだと理解していたリーフまでもが眉を寄せて笑っている大半の男達を振り返る。

しかし、二人が何か言う前に、それは起こった……。否、起こってしまった――。

ぶちん。

ミツキの中で、何かが切れる音がする。

その途端にミツキから溢れだした異様な空気に、言葉を言いかけた二人は一瞬言葉を呑みこみ、ミツキの方を振り返る。

笑っている男達もまた、一様に笑みを引っ込めて今しがた自分達がバカにした少女を見る。

当の本人はというと、感情制御の糸が切れた事によって戦闘と勘違いした補助スキルが自動的に立ち上がり、レベルの後押しも含めて、背中に黒いオーラ・・・もうむしろブラックホールも動きを出現させて、ゆっくり振り返った後、静かに顔を上げた。

途端にその蒼い瞳に捉えられた、先程言葉を発した男が「ヒッ！？」と声を上げて震え上がった。

瞳に宿る補助スキルは、【威圧 コウアーション】。

対象を威圧し、自身のレベルに応じて一定確率で移動不可の状態異常にさせる極一般の補助スキルでありながら、その効果とは別物に相手に恐怖を与えるとB F内で言われていた極悪スキル。

当然レベルがレベルなもので、相手に与える効果と、無関係ではあっても普通に与えられる恐怖は尋常ではないだろう。

ハッキリ言おう。

ミツキの怒りの沸点は、通常より些か低い位置にある。要するに、怒りの面に関しては基本的に短気なのであった。

「……狼に追いかけて、仕舞いにはエサにされる、だって？」

「「っ！」」

ゆつくりと紡ぐミツキの言葉に、探るまでも無く怒りが入っている事を悟った二人は、同時に息を呑む。

正直二人としては、ミツキがこの様に怒るとは予想していなかったのだ。

予想していなかったからこそ、笑った男達を咎めようとした。

しかし……

「はっ！ 狼のエサねえ……出来るものならやってみてほしいくらいよ？ 確かにあたしはアンタ達から見ればまだまだ幼い子供で貧弱な女の子。でもね、相手の実力図ってからそーゆうことは言った方がいいと思うよ？ それとも……」

淡々と、左手を腰に当ててそう言葉にしたミツキは、次の瞬間には顔に悪魔の微笑みを浮かべて、

「それとも、今ここであたしとやってみる？ 死なない自信があるならば、だけどね？」

こてんと小首を傾げながら、緩やかな弓型を描いた口で、そう言っ
て退けた。

「「「「「……」」」」」

当然ここまでやって手を上げるバカ、むしろ大馬鹿者はおらず、次いでふん、と勝ち誇った微笑みを浮かべたミツキは、くるりと向

きを変えて男達と共に固まっている二人の横を通り過ぎ、カウンターへと行って、カウンターにいる者達も現在進行形で固まっていると解ると、丁度ミツキが怒り始めた辺りからカウンターの奥の扉から入って来た15歳位の少女にいつもの様に微笑みを浮かべて問った。

「冒険者になりたいんですけど、何をしたらいいんですかー？」と。

冒険者に一人、トンデモない少女が入って来たとルーシッド中で噂になるのは、直ぐ後。

第八話 金銭感覚が最悪です。

「あ、はい。じゃあこの紙に名前とその他ご自身で必要だと思われる事柄の記入をして下さい。」

「はい。」

未だに固まっている者が大半を占めるギルド本部内で繰り広げられる日常的会話に、まっさきに立ち直ったのはカウンターに並ぶ人たちだった。

次にガレスとリーフ。

その他は各々、ゆっくりと自動再生していった。

それにしても・・・

（あたしのあの補助スキルほぼ全開の状態を見ても普通に対応するこの子って・・・只者じゃないよね。）

ぽつり、とそう胸中で零すミツキは、渡された紙に普通にカタガナで『ミツキ』、職業としてこれまた普通に『魔法使い』と書きながら、改めて少女を見る。

色白で華奢な身体に漆黒のドレスを纏ったその少女は、外見だけなら15歳程度。

ウェーブがかかった長い濃い金の髪に、氷を思わせる蒼い瞳。

ただし、普通に自分と同年代位の少女にしては、現状が現状なだけに些か落ち着き過ぎている。

（んーむ・・・、どう言う事だろう？）

必要な事を書き終わった紙をその少女に渡しながら悩むミツキに、少女がくすりと笑って、悪戯っ子の様な瞳でこう言ってきた。

「わたしのこと、気になります？」

「ほえ？」

突然の事に実の間抜けな声を出したミツキは、若干頬を赤くしながらも、うん、と頷く。

それに少女は笑って、

「明日、冒険者になる為の試験をします。その時に改めて教えますよ。」

と言って、奥の部屋へと引っ込んでしまった。

「・・・ふうん？」

引っ込む前に渡された、普通に日本語で『昼食後にギルドに来て下さい。』と簡潔に書かれた紙を見ながら、改めてどうやら文字はBFの時と同様に基本的には日本語を用いている事を確認しつつ、試験と聞いてにんまりと楽しげに笑う。

ミツキは突発的なイベントが大好物なのである。

BF時代では偶に運営がそれこそ何の前触れも無く突発的にイベントを開催する事があったのだが、それに全て参加している位にはイベント好きである。

まあ・・・裏を返せばどれだけ廃人なのが解る、とも言うが。

兎にも角にも明日の予定が決まったミツキは、完全に再起動してもういつも通りの雰囲気にもどっていた二人と共に冒険者ギルドを出た。

次に行くのは、今日泊まる為の宿屋だ。

「宿屋とかはじめてです！　どんな所か楽しみだなあ〜！」

「きつと満足できると思いますよ。」

「そうそう、なんとたって俺達のお勧めの場所だからな！」

今までと替わり無くはしゃぐミツキに、流石にこれ以上色々考えても無意味だと思った二人は、同じようにはしゃぐミツキを優しくな瞳で見守る。

程なくして付いた、白磁の大きめの家の前に立ったミツキは、ドアの横に立てかけてある看板を見て、小さく噴き出す。

木製の看板に幼い子供の文字を思わせる字体で書いていた宿屋の名前は《うぐいすの宿》。

「うぐいすって。この世界にウグイスなんているのかな？」

極々小さくそう呟きながら、以前テレビで見たウグイスを思い出しつつ二人に続いて宿屋の中へと入っていく。

この後に、想定外の展開が訪れると知りもしないままに。

それから約2時間程だろうか。

ミツキは借りた宿の、リーフの部屋で二人からみっちり今の世界の相場云々についてを永遠と聞かされていた。

部屋の件については、もちろんミツキの部屋もあるのだが、教えるならとリーフが自分の部屋に連れて来たのだ。それはもうガレスと共にほぼ強制連行で。

相場云々の話の件については、言うまでも無く。

ミツキは元々買い物と言うものを殆どした事が無かった。病院の近くのコンビニに看護婦さんと共にちよくちよく行っていた位だ。

当然この世界のお金の事情など知る由も無く……。その事が宿屋に泊るお金を払う時に、ばれてしまった。それからは勿論の事、このままミツキをお金について無知な人のまま放っておいたら大変な事になると、二人は大慌て。

結果、リーフの部屋でせめて基本は覚えて貰おうと、長い長い勉強時間となったのだった。

「よし、大体は教えたな。」

暫くしてやっと休憩の兆しが垣間見えたガレスの言葉に、ミツキは息を付く。

流石にこのまま晩食まで勉強なんて言う展開は避けたいところだ。

「そうですね……。ではミツキさん、最後に基礎を復習しておきますから、きちんと聞いていて下さいね？」

「はい！」

リーフの言葉に元気に返事をして、最後の確認を聞く。

「まず、今の時代の貨幣は、2つ。

一つは、銀色のコインに城の絵が描かれた『ゲル』。これです。」

そう言って手を掲げて見せる銀に輝く円形のコインには、精緻な洋風の城が描かれている。

これは、BFでの唯一の貨幣であつた名前もそのままの『ゲル』で間違いは無い。

（問題は「もう一つ」の方だもんね。）

こくと頷いて先を促したミツキは、次にリーフが掲げて見せた円形の、ゲルより一回り大きなコインに、若干表情を暗くする。

「そしてこれが二つ目。蒼銀色のコインに、ゲルとはまた別の城の絵が描かれた『グーゲル』。

これは先程も言った通り、一つでゲルの百個分にあたります。」

（これだよ、これ。）

胸中でそう呟いたミツキは、少しばかり記憶を反芻して、そして直ぐに諦める。

BFには無かったのだ。この『グーゲル』と呼ばれる貨幣は。

ミツキが今持っている貨幣は、当然の事ながらゲルのみ。

持っていないければ使う事も無いのは確かだが、これから色々な事が起こるだろうとは、漠然ながらも想像できる。

それこそ、グーゲルを手渡される時だつてあるかもしれないのだ。そんな時に基本的な貨幣であるグーゲルを正しく使わなければ、バカにされる事間違いないし、である。

「むう・・・」

「まーまー、金つてのは使つてみなきゃ分からない時もあるからな。少しずつ露店とかに行つて物を買つたり売つたりして学んでいけばいいさ。」

「・・・はい！」

ほぼ無意識で唸っていたミツキは、そうガレスに言われて、とりあえず色々試してみようという結論にいたり、ある意味では開き直ったともいえる元気な返事をしたのだった。

第九話 地図が無い何て死活問題よ！

翌朝、実に爽快な気分で目覚めたミツキは、一階に下りて食事を取り、ガレスとリーフに一言断ってから宿屋を出た。

理由は至極簡単で・・・

「わああ！ 本当に色々変わってておもしろい！」

要するには冒険者ギルドで言われた昼食後の試練までの暇つぶしもといすっかり風景が変わってしまったルーシッド王国内の見学である。

あちこちに点在する露店を覗きつつ、十字路の通路に沿って歩いて行く。

まだそれほど人はいないながらも、これから徐々に増えて昨日の様な活気が生まれる事を想像すると、なんとも賑やかな街だと思う。

露店の一つに地図を売っている所があり、ルーシッド王国とその周辺の地図を見せて貰おうと声を掛けたら、お世辞にもゲームの時間精緻とは言えないものの、かなり細かく道や建物等が描き込まれ、さらにはルーシッド王国の領域内全てと隣国のヴァンクウイシユ王国までの道筋が描かれたかなり範囲の広い地図を一つ、渡された。

まさかこれ程一気に載った物が出てくるとは予想していなかったミツキは、驚きつつも眺めて、とりあえずルーシッド王国の領域内は完璧にゲームの時とは道どこかおそらくは景色すらも変わっているのだと確信する。

一応、とルーシッド王国の国内だけの地図は無いかと聞いてみたら、案外あっさり出て来たものの、これまた一部を残して殆ど建物の配置が違っていた為、不思議そうにしている陽気な店主のおじさんを無視してがっくりと肩を落とした。

兎にも角にも、やはり地図は必要だと思ったミツキは、お金を扱う練習だとばかりに勢いで国内の地図と領域から隣国までの地図両方を買う。

問題は、

「この地図できちんと国内が周れるかどうか、よね。」
ぼつりと呟くミツキの瞳は、やけに真剣だった。

当然の事、自身が方向音痴だからと言う事もあるのだが、もし昼食までに宿屋に帰れなかったらギルドの試練にも行けない可能性があったからだ。

——そこは色々と抜け道ならぬ抜け手段を持っているのが史上最強のプレイヤーであるミツキの特権ではあるのだが、流石に毎回その抜け手段に頼る訳にはいかない。

普通に帰れる手段も、当然必要だ。

暫く、地図を買った露店の近くの邪魔にならない所で悩んだ末、一応大まかに十字路の道だけ覚えようと決定する。

ゆっくりと地図を見ながら噴水の所まで戻り、前後左右に続く通路を一つずつ周りをしっかり確認しながら進んで行く。

こんな時にも強化された記憶力は役に立つもので、しっかりとそ

これらの外見と地図の位置を記憶していった。

全ての十字路を歩き終えたら、早速と宿屋に戻りつつ結果を反芻する。

（とりあえず普通に地図を見て行動する事は、可能つと。でも・
・一体こんな綺麗な地図、誰が創ってるんだろっ？）

今度は別の事が気になりつつも、予定より幾分か早く宿屋に戻り、昼前まで帰ってこないと思っていたミツキがまだ昼には幾分か届かない時間に戻って来た事に対する驚きを隠そうともせずに挨拶するガレスに挨拶を返した後、

「あれ？ リーフさんは？」

と、もう一人がいない事に気付いて問いかける。

それに、ガレスはああ、と言って二階の方を見ながら、

「あいつなら今は部屋で用事してるぜ。何か聞きたい事があるなら、俺が聞くけど？」

と言う。

その答えにミツキは少し考えてから、気になった事を二つだけ聞いてみる事にした。

「さっき露店でルーシッド王国の領域内からヴァンクウイシュ王国までの過程が描いた地図と、ルーシッド王国の国内を描いた地図の二つを買って来たんですけど・・・この地図って、一体どんな人が創ってるんです？」

このミツキの問いに、ガレスは若干苦笑いをしながら、

「また随分とおかしな所が気になるんだなあ。てか、ミツキはヴァンクウイシュ王国は知ってんのか？」

と前置き程度の質問をしてくる。

それに、

「あー、まあ、少し気になっちゃって。それに六大国の名前位なら多分きちんと覚えていると思います。」

と少し曖昧に返事をしつつ先を促す。

ガレスは特に追求もせず、そうか、と言っただけで質問に答えてくれた。

「そういつた地図は、作る専門の奴らがいてな。基本的に全員国のお抱え者だ。だから正直俺らもそいつらについて詳しい情報を知ってるって訳じゃねーんだよな。」

「なるほど……。そうだったのかあ。」

「国のお抱え者」——そんな単語に、一体この世界はどうなっているんだと内心本気で疑問が湧きつつ、次の質問へと移る。

「えっと、それから……。ひょっとして地図って、他の国も同様に、領域内と隣国までの地図と、国内の二種類しか売ってないんですかね？」

至極真面目にそう問うミツキに、ガレスはうーんと唸った後、

「国とか国のお偉い方が持っている資料がどうなのかはしらねえけ

ど、基本的俺ら一般人が持つてる地図はその二種類だなあ。」

と、最後にそもそもミツキみたいに他の種類の地図がある事を考えてなかったから、こっちも詳しくは解らねーな……、と再び苦笑しながら言う。

そんなガレスにお礼を言ったミツキは、とりあえず色々考えてみるか、と二階の自分の借りた部屋へと上がっていく。

後に残ったガレスが、本気でミツキが何者なのか考えあぐねているとも知らずに――。

早急に自室へと入ったミツキは、取り合えずつい先ほど買ってきたばかりのルーシッド王国の国内の方の地図を床に広げ、そしてスペースースから取り出した今では「元」ルーシッド王国の国内の地図と見比べる。

「んー……。国内は建造物が色々建ったりなかったりするだけで、規模とかはあんまり変わってないっばいねえ……。」「

ぽつりと呟きつつも、次に領域内とヴァンクウィッシュ王国までの方の地図を広げ、同じくスペースースから、今度は何枚かに分かれた「元」ルーシッド王国の領域内とヴァンクウィッシュ王国までの過程を描いてある地図を取り出して、見比べてみる。

しかし――

第十話 新米冒険者の試験（前編）（前書き）

遅くなりました・・・（汗

第十話 新米冒険者の試験（前編）

昼——素早く昼食を食べ終えたミツキは、逸る気持ちを抑えきれずに宿屋を飛び出し、後からガレスとリーフが付いて来ている事を起動した【探索】のスキルで理解しながらも冒険者ギルドへと走った。

程なくして付いたギルドは、変わらず真っ黒な外見をさらして、その場に威圧感を湛えていた。

「さーて！ 試験とはどんなものなのでしょう！ かつ！」

かつ！の掛け声とは呼べない様な言葉と共に思いつ切りドアを開いて中に入るミツキ。

途端に内部からミツキに視線が刺さり——殆ど一瞬でその視線は逸らされた。

中にいたのが、昨日も居た者達とたいして変わり無かった、とだけ言っておこう。

そうして悠然とカウンターまで歩いて行くミツキに、勇気ある者が一人、声をかけた。

「よ、よう嬢ちゃん。 試験を受けるんだってな？」

それは、驚いた事に昨日ミツキをバカにする言葉を発した、張本人。

ミツキもぱちり、と一度瞳を大きく開いて驚きつつも、次の瞬間には楽しそうに微笑みを浮かべた。

「うん、そう。すっごく楽しみなんだ！」

「そ、そうか・・・」

このミツキの極々普通の対応に、少しばかり戸惑った男だが、直ぐに、今度は真剣な表情で真面目に言葉を紡ぐ。

「ここの試験はかなりキツイぜ。 なんとって冒険者ギルドのトップに位置する人が試験官だからな。」

「トップ？」

「おうよ。」

男の言葉に暫しコテン、と小首を傾げていたミツキだが、言葉の意味を悟った途端に不敵な笑みを口元に浮かべた。

「じよ、嬢ちゃん・・・？」

驚き若干引き気味の男に、再び普通の笑顔を浮かべたミツキは、まるで怖いものなど何もないと言う風な自信満々の顔で、男に言った。

「トップ上等。 どんな試験だろうと軽くあしらって冒険者になってみせるから。」

と。

そうして男との会話が終わったミツキは、昨日会った不思議な少女に導かれて、ルーシッド王国の街中から幾分か離れた森の中に来ていた。

・・・他の参加者2名と共に。

「よおっし！ 絶対この試験に合格して、冒険者になるぞぉー！！」

勢い込んで拳を天に突き上げているのは、がっちりした身体に革の鎧を纏った、金色がかった茶髪に夕陽の様な瞳を持つ男の子――
―会って早々した自己紹介で名乗った名前はライ。

「う・る・さ・い。ライ、私毎回思うんだけど、あんたってもう少し静かに出来ないの？」

そしてもう一人、ライに苛烈な言葉パンチを繰り出したのは、ミツキ程ではないにしろ、色白で細い身体に、術師風の白いローブを纏い、亜麻色のツインテールにブラウンの瞳を持った女の子――
同じく自己紹介で名乗った名前はシィナ。

二人もまた、作日に冒険者になりたいと来た者たちらしく、結果三人での試験となった。

しかしどうも複数人での参加は決して異例では無い様で、試験官・
・・・ならぬ昨日の少女はごく普通に三人を眺めていた。

暫くしてミツキは当然の事、ライとシィナの二人の準備が揃った頃を見計らって、少女が声をかける。

「はい、新米冒険者の三人方、こんにちは。 わたしはティア。今

回の試験で貴方達の判定を決める『監察士』です。」

優雅に漆黒のドレスの裾を掴んで一礼する不思議な少女——ティアに、ライとシィナは普通にお辞儀を、ミツキは彼女と同じような一礼の仕方で、礼を返した。

「これから、貴方達に行ってもらう試験の説明をするので、良く聞いていて下さいね？」

次いでティアが言った言葉に、度合いはあれど三者三様に真剣な雰囲気になる。

それを見て、笑みを深めたティアは、持っていた三枚の地図をそれぞれに渡してから、話し始める。

「試験、と聞くと何だか難しい様に感じてしまうでしょうけれど、内容は至って簡単。その地図に書いてある通りの道順を通って魔物を倒しながら、この森の最奥に置いてある昨日貴方達が契約用にした紙を取ってここに帰ってくる、それだけです。」

至極簡潔にされた試験の説明に、ライとシィナは、

「なあんだ。要するに魔物を倒して紙を取って帰ってくればいいだけか。」

「それなら辿りつくまで魔物を倒せばいいだけだし、魔物退治は何度もやって来た事だから、出来るね！」

と納得してお互い頷き合つが、ミツキはと言うと・・・

「え？　ほんとにそれだけ??」

と、逆にあまりのあつさりさに拍子抜けして、再度ティアに尋ねる。

聞かれた方のティアと言えば、ニコニコと可愛らしく微笑んだまま、

「ええ、それだけです。」

と答えてくる。

その言葉がとりあえずはどう頑張っても真実にしか聞こえない事を確信したミツキは、はあ、と溜息を一つ。

（魔物退治って言ったって……ここにいる程度の魔物じゃあ900レベルのシアンの手を見る限りあたしの力も相当強いってことだろうから——、一瞬で殲滅させない様にしないと、ライとシィナの分が消え去るわね。）

と、胸中で注意事項を色々並べつつも、スペーススから高レベルになってからは用済みだった弱い武器等の中の一つ、自分の身長程の長さの、木製で一方の端に白の宝玉が嵌っている杖を取り出す。

シィナも似た様なものを持っていたので、一応と、出したのだ。

当然、それを見た二人が黙っているはずも無く……

「わあ！ 私のと似てる杖！ ミツキちゃんもやっぱり魔術師だったんだね！」

「おお、マジかよ。折角同じ剣士志望の奴かと思ったのによー」

とそれぞれ瞳を輝かせたり落ち込んだりしながら声をかけてくる。

それに、

「あはは、あたしは基本魔法専門だからねえ。」
と苦笑を交えて対応しながら、ちらりとティアを窺う。

途端に絡み合う宵と蒼穹の不思議な蒼い瞳と、氷の冷たさを含んだ蒼い瞳。

一瞬ばかり、とお互いが火花を散らした。

それは、ある意味では実力を試す側の「貴方が一体何処まで出来るか見せて貰うわ」と言う言葉の代わりであり、ある意味では実力を試される側の「あんたの予想なんか遥かに超えた実力を見せてあげるから」と言う言葉の代わりであった。

ほんの一瞬。　　されど、一瞬。

それが合図となり、ティアは三人に声をかけた。

「三人方とも、夜の帳が下りるまでにはこの場所に戻ってきておく事を条件とします。」

さあ・・・」

『試験の始まりです。』

第十一話 新米冒険者の試験（中編）

試験開始の合図が言い放たれた途端に駆けだしたライとシイナの二人を追って、ミツキも早速と森に足を踏み入れた。

一歩中に踏み込めば、直ぐに足場は蔦だらけの草だらけ。

「こんな状態でよく地図なんか創れたわね……ってか、これだけ足場が悪かったら戦闘なんてまともに出来ないんじゃないの？」

一瞬の惨状についつい毒づきながら後方を見ると、すでにティアの姿は無く……

「ははあ、さては何処か近くであたし達を見てるってわけね。それで『監察士』、か。納得。」

直ぐにその意味を理解したミツキの言葉を、果たして彼女は聞いているのかいないのか。

静かながらも、決して無音では無く、時折聞こえてくるライとシイナの悲鳴を聞きながら、ミツキはゆっくりと森の中を進んで行く。

そして、ものの十分も経たない内に迷った。

「……よくよく考えたらこれってれっきとした『試験』なのよね。ただ魔物を狩って紙持って帰ってくればハイ合格、だなんてある訳なかったのよ……」

そう呟くミツキは、決して地図を見ていたのに迷った訳では無かった。

そもそも、地図自体がでたらめだったのだ。

つまり、要するにこの試験の本当の目的と言うのは――

「地図無しで最奥の紙が置いてある場所まで言って、そして夜までに帰ってこい、と。つまりはこう言う事か。」

苦々しく解答を言葉にしたミツキは、今日ギルド本部に入った時に男が言っていたキツイ、と言う言葉を思い出して溜息を付いた。

（確かに、これは本当の初心者には厳しいわねえ・・・）

初心者の事を考えればどれだけ鬼畜なんだと思わなくもない。
幾らこの世界でも【探索】のスキルが使えるからと言った所で、
低レベルでは調べれる範囲が狭いのはお約束なのだ。

が、しかし、ここまでの試験をする意味も、ミツキには何となく
理解出来た。

ガレスとリーフを見ていると分かる。

要するに、根っからの初心者にこれだけの事をさせておかなければならない程、危険なのだ。

冒険者と言う稼業は。

「・・・こりゃあ本当に只者じゃないね、ティアは。」

ぽつりと呟くミツキの顔は、今までのどの一面よりも真剣味を帯びていた。

何はともあれ、

「要するにとつと紙取って帰ってくれば良い訳ね、おっけい！」

何時までもこんな森の中に留まってはられない。

いずれにしろ生活費確保の為に冒険者になるのが最善の策だ。

決まれば後は行動するだけ。

ミツキは【探索】スキルを全開放して、ついでにやる気になった途端に自動起動した補助スキルの数々に後押しされながら、森の中を奔った。

【探索】のお陰で木にぶつかる事も無く、時々接近してくるこの間のグレーラビットやら真つ黒な色をした巨大な蛇型の『デスサーペント』やらの小物モンスターを持っている杖で殆ど勢い任せに殴り飛ばして倒し、順調に進んで行く。

——当然、少なくとも現状ではお前魔術師だろ、と言う言葉は全力で無視する方針だ。

途中でかなり道にそれてしまっているライとシイナの二人組を【探索】で見つけたが、あまり自分について聞かれる訳にもいかないし、そもそもこれは彼らの試験でもあるのだから協力プレイは無しとあえて無視して突き進む。

そうしてあつという間に二人を追いつき、更に森の奥へ。

当然森の中では奥に行く程敵は強くなるのはもうお約束だが、そ

うは言ってもたかが20、30だ。

ミツキの相手になるなど百年どころか軽く一億年は早いだろう。

（ある意味あたしにだけは選択ミスよね・・・この場所は。）

そう苦笑しつつも不敵な笑みを零すミツキは、そのままどんどん進み、遂に【探索】スキルに今までとは明らかに異なる物体——即ち紙が存在する事を察知した。

「——みつけ。」

にっとなつて更に走るスピードを上げようと・・・した、正にその時。

「っ!？」

必要スキルの一つ、危機的状況が迫った時、察知して知らせてくれる【直感】スキルの起動を感じたミツキは、今までのスピードを使つて思いつ切り宙へと飛び上がる。

すとな、と危なげなく着地したミツキは、直ぐに振り返つて【直感】スキルが発動した原因を探る・・・が、目に見えるものはないにも無く、けれども確かに【探索】スキルから流れてくる情報の中には存在した。

「ちよつとちよつと・・・冗談やめてよ? 何でこんな所にオオカミが出てくるのよ!？」

オオカミ・・・ならぬ、その狼型モンスターは、おそらくは特殊なスキルを用いて姿を隠しているのであろう。

視界には全く入らない脅威は、静かに獲物を追い詰める猛者となり、少女に迫る。

瞬間、ザツと地を蹴る音と共に、ミツキに飛びかかるモンスター・
・・・しかしミツキは、その攻撃を電光石火の如く見極めて避け、
思いつ切り杖を見えない敵に叩きつける。

「グルウ！」

途端に低い呻き声と共に視界に現れる、濃い藍色の毛に金の瞳を
ぎらつかせた狼型モンスター——『ブラウウルフ』。

「やっと正体を現したわねブラウウルフ！　って、だから何でレベル100のモンスターがこんな所に現れるのよっ！？」

ミツキは初めから突撃してきたモンスターがブラウウルフだと言う事は予想していた。

姿を隠す、プレイヤーも手に入れる事が出来た《魔法スキル》の一つ【透明化】は、モンスターでは狼型とゴースト型、そしてその他の極々例外的モンスターしか持っていないのである。

姿は見えずとも、【探索】からの情報によって形を狼と判断した後は、モンスターの名を絞るのもそう難しくは無い。

それにそもそも【透明化】スキルは、相手がプレイヤーであろうとモンスターであろうと、一度攻撃を当てれば解除されると言う事も、かつては廃人を通り越したプレイスタイルであったミツキの記憶にはしっかりと刻まれていた。

ただし、正直な点、今はモンスターのスキル云々などどうでも良

いのが実情であつた。

「あーもう！ 本気で意味が解らない！ 基本的にウサギ系のモンスターがいる森のラスボスはクマ系のモンスターだって相場が決まってるのに！！」

姿を現したブラウウルフの攻撃を避けつつ、三分の一程余ったHPを削ろうと杖を振るうが、これがなかなか当たらない。

叫びつつも言っている事は正当なミツキの言葉は、本来狼型モンスターがここにいるはずが無い事を示すには十分すぎる情報なのだが、当のイレギュラーであるブラウウルフ本人はそんなことお構いなし、である。

「こんのっ！」

遂には、真面目にムカついてきたミツキが放った攻撃魔法のスキルによつてあっさりレベル100と言うこの場ではありえない程の脅威となりえる存在は消え去り、森に静けさが戻る。

予想外の相手との戦闘によつてもたらされた感情の高まりを溜息を付く事で沈めたミツキは、もう十中八九この様な戦闘をしなければならぬ状況に導いた張本人である少女に、届けと声を張り上げた。

「帰ったら色々聞かせて貰うから覚悟してなさいよ、ティアー――！！！！！！」

空ではすっかり太陽が傾き、鮮やかなオレンジ色の光が森を包んでいた。

タイムリミットまで、もう少し。

第十一話 新米冒険者の試験（中編）（後書き）

なかなか執筆が進まない・・・w

なるべく早く投稿できるように頑張ります。

第十二話 新米冒険者の試験（後編）

ブラウウルフとの戦闘を終えたミツキは、もう半分くらいはティアに言い寄ってやろうと言う想いだけで最奥の紙が置いてある場所まで行き、自分の分をとってさっさとその場を引き返す。

「はぁ・・・全く・・・」

溜息を付きながら呟いたその後はあえて言葉にはせず、来た道をまた【探索】に頼って逆走し、胸中で改めてティアについて増えた情報を吟味する。

（おそらくどう考えてもあのブラウウルフはティアが召喚したものよね・・・となれば、少なくともレベル100には勝てるだけの力があるって事。 なら、とりあえずギリギリでも150はあるって事か・・・）

召喚。

それは、ミツキにしてみれば使い魔シアンを喚び出す事もそれではあるが、一般的には自分が倒したモンスターを召喚獣として登録する事で自分の支配下に置き、それらを地に呼び出す事を言う。

BFにおいて、シアンの様な使い魔は稀な存在だった為に、基本的な「召喚」と言えば専らそれこそ自分が登録したモンスターを呼び出す事であった。

ただし、スキルの中には専用のモンスターを呼び出すものもあったので、一概に召喚されるモノがフィールド上で徘徊しているモンスターだとは限らなかったのも確かではあったが。

いずれにせよ、

（ティア自身のレベルはともかく、さっきのどう考えてもあたしだけ特別なメニユーについての質問は絶対にしてやるんだから。）

と、結局は質問攻めにする事が最優先だと言い切るミツキにとっては、召喚についてなどほとんど蚊帳の外な状態であった……。

そうして森に入った時とは比べ物にならないスピードで出口に辿りついたミツキは、お目当ての少女がいない事に若干可愛らしい顔を不機嫌に歪めた。

暫く待っても帰ってこない辺り、おそらく苦戦しているであろうライとシイナを近くで見守っているのだろうが、それはそれで何だが無性に早く帰って来たメリットが削られてゆくようで、その後、結局夜の本当に僅かな手前で帰って来た二人を出口近くに確認するまで、ミツキはいらいらと退屈が混ざった時間を送る事となった。

が、それも流石に大分疲れた様子で歩いて来る二人を見れば、脇に追いやられる。

「お疲れ様。大丈夫？」

近づいて来た二人に声をかける頃には、いつもの微笑みを取り戻していた。

「おう！ 何とか生きて帰ってこれたぜ……」

「まさか冒険者ギルドの試験がここまできついなんて……。本

当に生きて帰ってこれてよかった……」

対して、ミツキの声に答えた二人は本気で冒険者稼業は厳しいものなのだと痛感させられたと語る。

「そ、そうだね……」

それを半笑いで凌いだミツキも、確かに決して楽ではないのだからと更に考えを改めた。

そして、暫く二人と話して、空が完全に夜へと替わった時。

何の前触れも無く、三人の前にティアが現れた。

「皆さん、試験お疲れ様でした。」

ニコニコと相変わらず楽しそうに微笑むティアに対し、ライとシイナの二人は、礼儀正しく軽くお辞儀をし、ミツキは腕を組んでふんつとそっぽを向いた。

先程まで自分達と普通に会話していたミツキのいきなりの変わり様に驚いた二人だったが、そこは突っ込むべきではないと判断したらしく、黙ってティアの次の言葉を待った。

流れる風が、一瞬空気を冷たくさせ――

次の瞬間、ティアの声がその場に響く。

「冒険者希望、ライとシイナ、そしてミツキ。……貴方達三人を、試験に合格したとみなします。これからは冒険者の名に恥じない様に、一生懸命依頼をこなして下さいね。」

次いで場を占めた轟く様な二人の喜びの声は、結局最後の方は二人につられてやったあ！と喜んだミツキの耳の奥に、暫く木霊する事となった。

歡喜の声が収まった後は、ティアにより三人ともに冒険者の証である銀の腕輪に何故かローマ字で『B O U K E N N S Y A』……
「冒険者」と刻まれた物を渡され、三人揃って右手首に嵌めた。
いざ嵌めてみるとなかなか様になっていて、表では決して言わなかったものの、内心ではミツキも冒険者になれた事を本気で喜んでいた。

が、しかし。

二人が喜びを噛み締めながら帰り、その場にティアと自分だけしかない状況となると、一変して怒りの表情を見せる。

「あの特別メニューは一体どういう事かしら？ 『監察士』さん？」

不機嫌にそう問うミツキに、ティアは今まで浮かべていた微笑みを消し、始めて見せた真剣な顔で言葉を発する。

「気になったの。 どう見ても普通の女の子なのに、あのギルド内にいた殆どの冒険者達を一瞬で黙らせた、貴方の事が。 正直、今までどんな事をしてこの世界で生きて来たのかも気になったんだよ？」

紡がれた言葉から読み取れる話し方が今までとは大きく異なり、

見た目相応となった事に眉を顰めたミツキだが、語られた言葉の内容にも反感を抱かずにはいらなかった。

「気になったのは解ったけど、だからってレベル100のモンスターを召喚してくるなんてちょっと酷過ぎると思わなかったの?」

「全く思わなかったわ? だって貴方はじめは手こずってたけど、攻撃魔法の一発で消せるだけの実力は持っていたじゃない?」

「う……」

左手を腰に当てながら質問した自分の言葉に対して、即座にニヤリとした笑みと共に帰って来た答えに、ミツキは声を詰まらせた。

おそらくは、彼女は気付いたのだ。

ミツキがかなり高いレベルを持つ存在だと言う事に。

(……ちょっとマズインじゃない? この状況。)

追い詰めるつもりでいた相手から思わぬ反撃をくらって、少しばかり焦る。

が、どうやら相手は違った様で――

「でも……強い人が冒険者になる事って、良い事だと思うの!」

一転して本当に無邪気な笑みを顔に浮かべて、ティアはそう言った。

「は?」

当然の如くぽかんとするミツキに対し、ティアは微笑んだままミ

ツキに近寄りその両手を取って、そのままの笑顔で言った。

「だから、お互い高レベル者同士、お友達になって！」

「……へ？」

当然、いきなり言われた言葉に、頭上に？マークを浮かべるミツキ。

けれども、ティアはそんなことはお構いなしで言葉を続ける。

「わたし、暫くこのギルド本部にいる事にしたら、何時でも会いに来てね、ミツキさん！」

本当に嬉しそうな微笑みを浮かべてそう言ったティアに、ようやくミツキは真実を掴んだ。

（つまり、同じ高レベルの友達がないから、友達になってほしかったっていう事か……。だから特別メニューを用意してでも高レベルで間違いが無いか確認した、と。）

納得した後は、一気に脱力した。

そうなるのも当然だ。

要するにこの少女の姿をした冒険者ギルドのトップさんは、ただただ友達がほしただけに行動を起こしていたのだから。

解ってから改めて考えると、なんとも可愛らしい所業ではないか。

しかし、それでも一応、

「だからって、次からはレベル100なんてモンスターけしかけてこない様にね？ あたしだから無事だったけど、他の人じゃあそう

簡単に倒せない場合もあるんだから。」
と注意はしておく。

それに本当に子供らしく「はい！」と笑ったティアは、もう遅いから帰るべきだとミツキに言う。

その言葉で、ふと頭上を仰いで見えた予想以上の空の闇の濃さに、ああ、と頷く。

「確かにもう大分遅くなってるみたいね。 んじゃあ・・・。」

と、そこまで言うってからティアを見る。
ティアは一瞬きょとん、とした後、ミツキが言いたい事を察したのか、ニコリと微笑みを浮かべた。

「「また、明日。」」

試験とはある意味本当に名ばかり。

ミツキに、予想外の友人が出来た瞬間であった。

第十三話 夜と依頼と不思議な夢（前書き）

サブタイトルのネーミングセンスが・・・
ご了承ください（泣）

第十三話 夜と依頼と不思議な夢

ミツキにおかしな状況ながらも友人が出来た夜。

結局ギルド近くで待機していたガレスとリーフの二人を、大分手前で【探索】のスキルによって見つけ、悪戯半分、心配してくれたお礼を言おうと思う本心半分で途中まで付いて来ていたティアに断って全力疾走。

当然流石に付いて来ていた事を知られるのはマズイと判断したのか、二人は思いつきり走って宿屋まで舞い戻る。
それに続いて、本当に何秒かの差で宿屋に付いたミツキは、知り合いの二人が肩で息をしつつも、

「お、お帰り！」

「ど、どうでしたか？」

と言うのに、内心してやったり、と思いながらも表面上は笑顔を湛えて右手を掲げ、冒険者の腕輪を見せつつ、

「この通り！ ばっちり合格しましたよー！」

と元気に宣言した。

これには二人も疲れが吹っ飛んだようで、まるで自分の事の様に喜んでくれた。

その後、遅まきながらも用意してもらった晩食をたらふく食べ、幸せな気分になりながらベットに横になったミツキだが、何か不思議

議な夢を見た。

『——！——りて！？』

『——ては——な——！——開——る——、……』

そう言葉とも言えない言葉で何かを語りかけてくる誰かと、

——望むのなら……。

と優しく語りかけてくる誰か。

しかし、結局何を言いたいのかは理解できず、その夢は闇に沈んだ。

朝——昨日より遅い時間だった為か、街の騒音……ならぬ喧騒で目覚めたミツキは、何か引つかかるな、と思いながらも今日は別の服を着ていく事に決めて、早速と着替えた。

纏った服は、厚めの白の紗の生地、とても薄い水色の紗を重ねて下に行く程波打った襞の蒼が濃くなる様にした、あまり広がり無し二の腕に掛かる肩袖のある、膝を少し過ぎる長さの薄蒼のワンピース型ドレス。

効果は以前の服と同じくHP及びMP100増加。

「よし！ 着替え完了っ。」

衣装を新しくしたミツキは、上機嫌で下へ降り、服装が変わった

事に驚きながらも似合うと褒めてくれるガレスとリーフの二人の言葉に赤くなりながら朝食を食べ、早速冒険者ギルドへと出かけた。

「おはようございます！」

勢いよくドアを開けて中へ入って来たミツキに、一瞬イスに座る者達がびくりと肩を震わすが、当の本人はそんなこと自業自得だと・・・むしろ今更だと、当然無視して掲示板へと歩み寄った。

掲示板には色々な内容が書かれた紙が、やはりそこそこな量張ってあった。

素材を取ってきてほしいと書いてあるもの、魔物を狩って帰ってきてほしいと書いてあるもの、各自のパーティーのお誘いや、てだれの剣士、もしくは魔術師ならば、騎士団や魔術師団に入ってほしいと言う依頼などもある。

その中でもミツキが目付けたのは、モンスターの角に埋め込まれた宝玉を持ってきてほしいと言う依頼だった。

依頼人は名前こそ知らない人だったが、直ぐそこで言っていた同業者の言葉を盗み聞いた限りでは、この街で比較的有名な武器屋『ゴアアン』を営んでいる主人。

依頼にあるモンスターの名前は『ホーンラビット』で、つい先日
の冒険者試験でも出て来たグレーラビットの強化版の様なモンスターだ。

ちなみに出現場所は、ミツキ自身が初めてこの世界で目覚めた森から程近い洞窟で、レベルは60と比較的初心者にとっては厳しい存在。

とは言っても、ミツキにとってはおたかがレベルが40か60かの差など関係の無い事ではあるが。

「これ位なら楽勝、かな？」

にこりと微笑んだミツキは、先程からミツキの横に立っていたが、敢えて気付いていない振りをしていたティアにその紙を渡して、驚いた彼女にニツと意地悪く笑ってから、その依頼をやりたい旨を伝えた。

「もゝ、意地悪。」

「あら？ アンタほどじゃないはずだけどー？」

「む。 いいですよーだ！ 承りました。 でもこれ、期限が後2週間しかありませんけど・・・大丈夫？」

言い合いながらも条件をみてミツキに聞いて来るティアに、彼女は口を弓型にして笑った。

「愚問よ。」

それから、善は急げと早急に宿屋へと戻ったミツキは、丁度はじめの森まで行くのに何を持って行ったら良いか聞こうとしていたガレスとリーフを見つけ、駆け寄る。

と、何やら二人も待っていましたと言わんばかりに待ち構えているではないか。

これには、今日は二人ともギルドに付いて来ていなかったと「探

【索】で調べて解っていた答えを含めて疑問符を浮かべるが、結論が出る前に二人の近くへと辿りついてしまう。

（ま、今から教えてくれるか。）

当然の如く問題を先送りしたミツキは、とりあえず自分から話そうと口を開く。

「ガレスさん、リーフさん。あたしギルドで二人に初めて会った森の近くにいるモンスターの素材を集める依頼を受けたんですけど、何を持って行ったら良いか教えてくれませんか？」

普通に微笑みながら言ったミツキの言葉に、突然二人は驚いた顔をする。

「？ どうしました？」

いきなりの二人の驚き様に再び疑問を浮かべるミツキだが、今の疑問は一つ前の疑問と共に一気に解決された。

「実は、私達もミツキさんにあの森・・・正確にはあの森の近くにあるとある村に一緒に来て貰いたいと思っていた所なのですよ。」
「えっ？」

まだ若干驚きが覚めないながらも微笑みを浮かべてそう言ったり
ーフの言葉に、ミツキは二人も自分に用事があり、そして尚且つ目的場所が大体同じだと言う事を理解した。

「その村にちょっとした用事があってな。どうせ森も通るから、ミツキの方の用事も済むだろうし。一緒に行こうぜ？」

続いて笑みを浮かべながらのガレスの言葉に、ミツキは納得、と頷いた後、

「はい！　一緒に行きましょう。」

と返事をした。

第十三話 夜と依頼と不思議な夢（後書き）

次の更新は何時になる事やら・・・w

第十四話 もう一つの二人の姿（前書き）

お久しぶりです。

今回はさすがにそろそろ更新しないとっ！！！ と思い投稿いたしました。

が、正直言ってまだ進められるか危うい状況ですw

更新停止はしませんが、おそらくまた次の話を出すのになりの時間有するかと……

こんな駄文かつ超カメ更新でよろしいのならば、また次まで気長に待っていて下さい><

では、久々のお話を少しでも皆様に楽しんで頂ける事を祈って――。

第十四話 もう一つの二人の姿

結局一緒に行く事に決まったその後は、食糧の買い込みやら武器の整理やらと双方とも慌ただしく準備をした後、結局昼食を食べてから出発する事となった。

リーフは何か用事があるらしく、ミツキはパンとスープの定番昼食——当然味に不満など一切ないが——を食べ終えた後はガレスと二人で街の出入り口を少し出た所で待機していた。

が、暫く経って現れたリーフが割と大きな荷馬車を牽いている馬と共に現れたのには流石のミツキも驚いた。

「り、リーフさん、それって一体・・・？」

勢い込んで尋ねるミツキに、隣にいたガレスは「また同じ反応されてやんのー！」などと言いながら爆笑し、そんなガレスにきゅつと眉を顰めたものの、直ぐに苦笑へと表情を変えたリーフは、ミツキの質問に静かに答えた。

「私・・・正確にはガレスも、一応こう見えて“運び屋”でもあるんですよ。」

「・・・へ？」

いきなりの意味不明行動&知らない単語発言に固まるミツキに、再度苦笑するリーフ。

昼食後の爽やかな風が、ガレスの笑い声を乗せてルーシッド王国の上空へと舞い上がった。

ひとしきりガレスが笑った後は、夜になる前には山の手前まで行かなければならないと言う事で、早急に出発した。

リーフはそのまま馬にまたがり、ミツキとガレスはそれぞれ馬車の中にある荷物の隙間に座って進んでいる為、比較的速度は速い。

ゴトゴトと言う音と共に順調に山へと進んで行く道中。

日だまりの様な陽光に照らされて思わずうとうとしながらも、ミツキは先程の事について前方のリーフに訪ねた。

「リーフさん。さっき言ってた『運び屋』って、一体何なんですか？」

疑問の意が籠った言葉で問いかけられたリーフは、前から視線を外さずに言葉を返した。

「ああ、ミツキさんは知らなかったんですね。」

次いで、再び苦笑しながら答える。

「自分で言うのもなんですが……『運び屋』とは、国から命じられた物資を特定の場所に送り届ける資格を持つ者の事を言う俗称なんですよ。」

「え！？ 国の！？」

この言葉には身を乗り出して驚きを現すミツキに、隣にいたガレスが危ないと抑えつつも言葉を発する。

「そうそう。表向き……ってか、すること自体は物資を運ぶただの荷物運びだが、当然実力もさることながら国からの信頼も無くちや一つだつて運べやしない。」

何だかんだ言つて俺達は一見ふつーの冒険者に見えて、国のお抱え者……って程じゃあないけど、結構国の上層部に気に入られてる存在なんだぜ？

ちなみに今から行く村ではな、ルーシッドの現国王陛下の知り合いがいるんだ。」

「そ、そうなんですか……お二人つてすごいんですねえ！」

今まで普通——とは流石に思っていなかったものの、国との関わりがあつたと聞かされては驚かざるを得ない。

ミツキは二人の凄さに素直に驚きながらも、ガレスが語った言葉の最後にあつた一文に疑問を覚えた。

（……現在の国王の知り合いが何で王都から離れた村にいるんでしょうか？）

実の所内心では半眼であつた。

決してあり得ない話だとは思わない。

けれど、国王の知り合いと言う事はそれ相応に何かしらの高い地位に付いていたと思うのが普通だ。

そうでなければ権力者か。

しかし、住み心地も権力も持たずに一山越えた村にいるとは一体どういう事だ。

（目的はその村に物資を届ける事だとして……。他にも何か

ありそうだね？)

胸中でそう言葉にしたミツキは、ほんの一瞬だけ笑みを浮かべた。

——獲物を狙う狩人の様な。

はたまた、無邪気に遊ぶ中で、小さなアリを踏みつぶそうと狙う瞬間の子供の笑みの様な。

弓型に弧を描く、笑みを。

彼女の直感は、感じたのだ。

イベントが発生する可能性がある、と。

しかし、その笑顔をみてしまったガレスとしては、表面上はたいして変わらなかったものの、内心では穏やかでいられなかった。

(ミツキの奴……絶対何か勘づいたか、もしくは企んでやがる
！！)

彼女の弓型の微笑みが何か厄介事が起こるキーワードだと、どうやらガレスは早々に理解していた様だった。

それから数時間。

目安としていた夜より少し早めに山の手前まで辿りついた三人は、夕焼け色に染まる空を時々眺めながら野宿の準備をしていた。

今回は、前回で覚えた知識を生かして作業に加わりつつ、そう言えばとミツキは今朝の事を思い出していた。

（なんか・・・夢を見た気がしたんだけどなあ？）

臍に浮かぶ記憶を何とか繋ぎ合せようと頑張るものの、霧が掛かった様なもやもやを含んだピースではとても組み合わせられそうにない。

（一体何だったんだろう・・・？）

少しだけ眉を寄せてそう胸中のみで語るミツキの思考は、晩食の準備をしようと言う二人の声に遮られた。

「あ、はい！」

二人の言葉に元気に返事をしつつも、次の瞬間には明日の夕方辺りには着くのではないかと予想されるまだ見ぬ村へと想いを馳せていた・・・。

星と月の光のみが輝く夜。

知識を欲し、新たな出会いに胸を躍らせるミツキは、静かにその瞳を閉じ、眠りへと落ちて行った――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0201s/>

レーゾンデートル

2011年7月27日07時00分発行